

# 新『教会通信』(2018年11月)

☆(聖書に今日を聞く)☆

伊豆イエス之御霊教会

牧師 三崎 紘

伊東市十足324-37

TEL 0557-45-3692

FAX 0557-45-7081

<http://izukogen.wonderful.to>

ハレルヤ!

◎『我は神の賜いたる恩恵に随いて、  
熟練たる建築士の如く基を据えたり、  
而して他の人その上に建つるなり。  
然れど如何にして建つべきか、おのおの心して為すべし。  
既に置きたる基のほかは誰も据うること能わず、  
この基は即ちイエス・キリストなり。  
人もし此の基の上に金・銀・寶石・木・草・藁を以て建てなば、  
各人の工は顕るべし。かの日これを明らかにせん、  
かの日は火をもって顕れ、その火おのおのの工の如何を  
試すべければなり。』 (コリント前書第3章10節～13節)

神様は、上記コリント書の記者パウロを異邦人への伝道者として使命をお与えになられ、使徒パウロもその期待に充分に答えて善き伝道者としての使命を全うなさいました。

上記の聖言は、私たち本来は異邦人でありながらも現在、神に選ばれ御救いへと招き入れられた者に取りましては、大変に重要な神の御旨であると受け止めて謹んで学ばせて頂きましょう。

此処で使徒パウロが申し述べたき事柄は、こう言う事であります。

※『私は神様からのお恩恵を受けて、熟練した腕利きの建築士のように信仰の基を据えました。

信仰者各々は、その基の上に形ある物を建てるだけであります。

然し、ただ建てれば良いと言うのではなく、細心の注意を払ってそれぞれが信仰に依って立派な物を建てなければなりません。

私が据えたのは“主イエス・キリスト”を基とした物でありますから、その土台を勝手に変更する事は出来ません。

その土台の上に、各々が与えられている信仰に従って建ち上げるのです。

金や銀や寶石など高価な物をふんだんに用いる者もいるでしょうし、又は木や草や藁など身の周りの物を使う者もいるでしょう。

それぞれに与えられた状況の中で、その者の地上での信仰生涯が終わりを告げる時、その者は、神様の評価を受ける事になります。

その者が生涯を通して建ち上げた物は、火即ち神のご臨在の御座を前にして厳しい評価を受ける事になります。』

◎『その建つる所の工、もし保たば値を得、  
もし其の工焼けなば損すべし。』

(コリント前書第3章14, 15節前半句)

その審査の結果、土台の上に適切な材質で建てた者は善き評価を受け、反対に火の中に焼け尽きて大損害を被る者も出て来ます。

私たち此の地上に生を受けた者は皆、地上での生活の総てを神の御使い(天使)達が克明に記録を付けており、終わりの時それを証拠品として、神の審判を受ける事になります。

(ヨハネ黙示録第20章12節等)

此の世に於ける我らの信仰生活は、その生涯を通して如何に聖書の導きに遵い得たか、また全身全霊を以て神を愛する事が出来たか、神はその者のあらゆる生活面を観ておられ、それらを以て審判をなさいます。

一例を挙げますならば、

◎『常に喜べ、絶えず祈れ、凡てのこと感謝せよ、  
これキリスト・イエスに由りて神の汝らに求め給う所なり。』

(テサロニケ前書第5章16, 17, 18節)

如何でしょうか？ 短い聖言ではありますが、是だけの事であっても、神様が自分へのご命令として与えて下さった聖言として有り難く身に帯びて生涯を送れる人は、誠に幸いな信仰生涯であります。

水と霊のバプテスマに与り、神に選ばれた者として、その名を天国に記録された者である事を牧師によって宣告されていながら、神キリスト・イエス様を本気で愛し本気で信ずる事が出来ないとするならば、主イエス様のあの十字架での御業は、その者に取って一体何であったのか？

お痛みとお苦しみと辱めに耐えて、異邦人である我らの罪を贖って下さった主の御愛に何ら報いる事の無い者を、果たして神は、お約束の通り神の子として天国に招いて下さるのでありましょくか？

“水と霊”に依る御救いに与った者は、その将来が約束されているからと言って、自分が思うが儘の行動を取っても良い、と勝手放題の生き方を神様はお赦しになっておられるのではありません。

◎『もし人、主を愛せずば詛わるべし、我らの主きたり給う。』

(コリント前書第16章22節)

先に述べました聖言の中に、使徒パウロが設えた基の上に建てる建築物の材料として、金・銀・寶石・木・草・藁とありましたが、決してその品目ずばりを指しているのではありません。

神様が信仰者各々に与えておられる信仰心や財産や時間などを、可能な限りの範囲内で、神や隣人に対する純粋な愛を以て惜しめない行動が執られたかどうか、それ等が神様の御前に問われるのであります。

例えば、安息日。

例えば、福音伝道。

例えば、什一献金を始めとする献げ物。

此等の一つ一つは、神に対する真の愛が大前提と成っております。

貴方にとって、大切な時間を費やさねばならない安息日礼拝への出席であり、福音伝道も又、大切な時間と労力を必要と致します。

什一献金や折々の献げ物は、信者にとっての出費となります。

主イエス・キリストを真心から信じ愛する者にとって、心から感謝してお献げ出来る献金であっても、神に対する信仰が半端な好い加減なものであるならば、財布を見ながら躊躇して仕舞う事になります。

神は上辺では無く、人の心を見給う御方であられます。

◎『我キリストと偕に十字架につけられたり、  
最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。  
今われ肉体に在りて生くるは、我を愛して我が為  
己が身を捨て給いし神の子を信ずるに由りて生くるなり。』

(ガラテヤ書第2章20節)

聖書の聖言は、ただ丸暗記すれば良いと言うものでは無く、ご自身の御心の伝達者として神がお立てになったパウロ先生を通して、将来、神の子と成るべく選ばれた私たちに授けておく為に、読み手つまり貴方や私に宛てられた書簡(手紙)なのであります。

今、上記の聖言に触れておられる貴方に、正しく神に選ばれた神の御子となる貴方に、神は此の文言の一言一句を貴方自身の物として心にしっかりと刻み込む事を求めておられます。

献金も福音伝道も安息日礼拝への出席も、神様が貴方の神に対する忠誠心を試みておられる事は間違いありません。

“水と霊”の御救いに与っている貴方は、もう世の者達のように天地萬物の創造者である神・主イエス様と無縁の者ではありません。

貴方は、主イエス・キリストの聖名に由る正しい洗礼式に与っており、つまり、キリストと共に十字架に付けられて一度は死んだ身であります。

ロマ書第6章の聖言を、列記致します。

◎『なんじら知らぬか、  
凡そキリスト・イエスに合うバプテスマを受けたる我らは、  
その死に合うバプテスマを受けしを。』(3節)

◎『我らはバプテスマによりて彼とともに葬られ、

その死に合わせられたり。これキリスト父の栄光によりて  
死人の中より甦えらせられ給いしごとく、  
我らも新しき生命に歩まんためなり。』(4節)

◎『我は知る、  
われらの旧き人、キリストと共に十字架につけられたるは、  
罪の軀ほろんで、此ののち罪に事えざらん為なるを。  
そは死にし者は罪より脱るるなり。』(6節)

全身浸礼に由るイエスの聖名が用いられた正式な洗礼に授かった貴方は、間違い無くキリストの死に合うバプテスマ(十字架に於いてお流し下さった主の御血に全身清められた洗礼式)を受けておられますし、罪の軀は滅んでサタン(悪魔)の支配下から離れて、神と偕に新しき生命に生きる為のスタートが切られたのです。

旧き貴方は、キリストと偕に死んだ事を自覚するべきであります。

◎『されば罪を汝らの死ぬべき軀に王たらしめて其の欲に従う事なく、  
汝らの肢体を罪に献げて不義の器となさず、  
反って死人の中より生き返りたる者の如く己を神にささげ、  
その肢体を義の器として神に献げよ。』(12節13節)

主の十字架の御業に依って、現代の此の世に支配権を有っているサタン(悪魔)と縁切りをした貴方は、世の者達と同じ価値観を以て肉欲を追求するのでは無く、ゲヘナ(地獄)行きの運命から永遠の生命へと運命が転換された幸運を機に、軀全体を使って神に喜ばれる神の子に相応しい生活を心懸ける事を主ご自身が望んでおられます。

勿論、全き御救いは“水と霊”とありますように、洗礼を受けた者は、神の霊、即ち聖霊(イエスの御霊)を受けなければ、全き御救いとは言えません。聖霊(イエスの御霊)は、神の霊そのものであり、即ち神であります。

◎『汝ら罪の僕たりしときは義に対して自由なりき。  
その時に今は恥とする所の事によりて何の實を得しか、  
これらの事の極は死なり、』(ロマ書第6章20節21節)

◎『然れど今は罪より解放されて神の僕となりたれば、  
潔にいたる實を得たり、その極は永遠の生命なり。』(22節)

真の御救いに与るまでは、キリストの教えなど気に掛けた事も無かったのですが、今から思えば恥となる事を平気で行っておりました。

あの儘でしたら、その終着点は第二の死(ゲヘナ)でありました。

しかし今は、過去の罪の総てが精算されて神の教えに従う事が出来るのですから、神の喜び給う祝福の路を感謝して歩んでいる限り、その行き着く先は神の国であり、神と偕に永遠に生きる運命が開かれております。

幾度も繰り返して申し上げますが、ヨハネ傳第3章5節の聖言に随<sup>したが</sup>って、正しい“水と霊”のバプテスマを頂<sup>ちようだい</sup>戴した我らは新しく神の国に生まれた者であり、裡<sup>うち</sup>に戴いているイエスの御<sup>のみたま</sup>霊様を中心とした信仰生活の中に在りますと、常に神ご自身が我らの先頭を切つて禍<sup>わざわい</sup>の総てを排除して下さり、また後ろ盾と成つて働いて下さいますから、世間で言う奇蹟<sup>きせき</sup>や不思議な祝福の現象は常<sup>じようどう</sup>道と成つて顕<sup>あらわ</sup>れて参ります。

私たちは此の地球上に子孫も含めて永遠<sup>とこしえ</sup>の都<sup>みやこ</sup>を持っている身ではありませんから、何も知らぬ者達のように此の地上の事柄に何時までも執<sup>しゆうちやく</sup>着する事なく、やがて神様と共に活<sup>せい</sup>きる聖なる都<sup>みやこ</sup>・新しきエルサレムでの日々を思い描いて其の日を待ち望<sup>いの</sup>み、禱<sup>いの</sup>りの中に主の智慧<sup>ちえ</sup>と聡明<sup>さと</sup>とを求めて前進させて頂きましょう。

主が迎えに来て下さる日は、異邦人の救われる数が満ちた時である、と聖書に示されておりますから、一人でも多くの身近な隣人へと福音<sup>の</sup>を宣<sup>つた</sup>べ伝へて行く事<sup>これ</sup>、是こそ神様がお喜び下さる最高の行動であります。

現代を生きる我ら基督<sup>クリスチャン</sup>者の此の世での目的は、決して金儲<sup>かねもう</sup>けや資産を増やすような世俗的<sup>やしん</sup>野心<sup>やしん</sup>では無く、また宗教的野心からの社会正義を振り翳<sup>かざ</sup>して野望<sup>のみ</sup>を満たすのでも無く、唯々<sup>ただただ</sup>天地・萬物の創造者であられる主イエス・キリスト様のご再臨<sup>おとす</sup>が一日も早く訪<sup>おとす</sup>れるのを願う者であります。

神様がお喜び下さる事を、私たちも喜びとし楽しみとして参りますと、此の世に生を受けた本当<sup>い</sup>の意義<sup>ぎ</sup>が鮮明<sup>せんめい</sup>に解<sup>い</sup>って参りますし、活<sup>あ</sup>かされている事そのものが有<sup>あ</sup>り難<sup>がた</sup>く感謝<sup>おとす</sup>出来るように成つて参ります。

神様のご存在は、信ずる者の上に絶<sup>た</sup>えず顕<sup>あらわ</sup>れる“証<sup>あかし</sup>”を以て、第三者にも証明出来るものであります。

世の宗教家達は宗教哲学などと言って、小難<sup>こむずか</sup>しい原理を理屈<sup>と</sup>っぽく説<sup>と</sup>くばかりで、その神の有する権威<sup>けんい</sup>や権能<sup>けんのう</sup>が信仰者の上に徴<sup>しるし</sup>・不思議・奇蹟<sup>あらわ</sup>となつて気軽に顕<sup>あらわ</sup>れる事など説く者はいません。

本物の神ならば、信じて慕<sup>した</sup>つて来る者を放置してはおきません。

主イエス様は、十字架にお掛かりになられる前夜、お弟子達との最後の晩餐<sup>ばんさん</sup>の席で、此のように仰<sup>おつしや</sup>有いました。

◎『誠<sup>まこと</sup>にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業<sup>わざ</sup>をなさん、  
かつ之<sup>これ</sup>よりも大いなる業<sup>わざ</sup>をなすべし、われ父に往<sup>ゆ</sup>けばなり。  
汝らが我が名<sup>な</sup>によりて願<sup>これ</sup>うことは、我みな之<sup>な</sup>を為さん、  
父、子によりて栄光を受け給<sup>たま</sup>わんためなり。  
何事<sup>な</sup>にても我が名<sup>な</sup>によりて我に願<sup>な</sup>わば、我これを成<sup>な</sup>すべし。』

(ヨハネ傳第14章12, 13, 14節)

主がお語りになつておられるお言葉の一つ一つを、主ご自身が私たちに向かつて直接<sup>おつしや</sup>に仰<sup>おつしや</sup>有つておられるお言葉として信じて疑<sup>み</sup>わない者には、主イエス様も特別な御<sup>み</sup>思<sup>おも</sup>いを持って接して下さいます。

私たちの信仰は、主イエス様が主を信じようとする者の気持ちを汲み取って徴・不思議・奇蹟を以て“お証”を与えて下さらなければ、決して神の子供として順調に育つものはありません。

主イエス様の御前には常に心から謙って、聖書に記録された聖言に疑義を挟む事なく、素直に聞き遵う姿勢が肝要であります。

◎『我いま人に喜ばれんとするか、或いは神に喜ばれんとするか、抑もまた人を喜ばせんことを求むるか。

もし我なお人を喜ばせおらば、キリストの僕にあらじ。』

(ガラテヤ書第1章10節)

冒頭に記しましたコリント前書第3章の聖言は、その後、14節と15節の前半句までを記しましたが、残り15節後半句は下記の通りであります。

◎『然れど己は火より脱れ出づる如くして救われん。』

火に試されて或いは総てを失う事になるかも知れませんが、それでも、その者の生命(靈魂)は、辛うじて助かると記されております。

神様は、一度お決めになられた事は、必ず履行なされる御方であられる、と以下の聖言を以て明確にしておられます。

◎『それ神の賜物と召とは変わることなし。』

(ロマ書第11章29節)

◎『我らは眞実ならずとも、彼(神)は絶えず眞実にましませり、彼(神)は己を否み給うこと能わざればなり。』

(テモテ後書第2章13節)

つまり、“水と霊”のバプテスマを受けておりながら、100パーセント神の言い付けに遵う事が出来なかった者が在ったとしても、その者の生命の本源である靈魂は、約束通り神の国(天国)に引き上げて下さる、とは神様のお言葉であります。

但し、その者の上に神の子・神の家族の一員としての榮譽が履行されるかどうかは、神様の御胸の中であられます。

私たちの教会としての目標は、“水と霊”の御救いに与り、御霊の導きに遵って信仰生活を全うし、主のご再臨の時もしくは個人的に召されても、主イエス様に始めて御目通りが適った時、

◎『宜いかな、善かつ忠なる僕、汝は僅かなる物に忠なりき、我なんじに多くの物を掌どらせん、汝は主人の歓喜に入れ』

(マタイ傳第25章21節他)

と、此のようにお声を掛けて戴き、迎え入れて戴く事であります。

世の中が大きく変化しつつあります。

現今の米国大統領がアメリカ・ファーストの理念りねんの下、まさかの信じられない政策を国内外で取り続けており、先の終戦後からずっと米国に或る種の親しみを感じて来ました日本人としましては、突然ひょうへんの豹変ひょうへんぶりに驚きと共に今後の世界観に戸惑いを覚える処であります。

先月末に登場したブラジルの新大統領が、米国大統領に心酔しんすいしていると言う事で、早速マスコミが彼の飛んでも無い発言を幾つか伝えております。

欧州28カ国が一枚岩となっていた筈の欧州連合も、英国が抜けリーダー的存在であったドイツを始め、方々に罅ひびが入って来ております。

世界中に、今後このような気風きふうが蔓延まんえんして来るのでありましょう。

◎『彼（キリスト）は凡ての政治まつりごとと権威けんいとの首かしらなり。』

（コロサイ書第2章10節）

聖書には明快めいかいに、我らの神が、世界各国の元首げんしゅ達の更さらに上に位置する政治まつりごとと権威けんいとの頭かしらである事を明示めいじしてお出いでであります。

神の人類に対するご計画・ご経綸けいりんはいよいよ其の終わりに近付いており、その日が迫せまって来ますと、人心じんしんに大きな変化が生じて参ります。

◎『また不法ふぼうの増すによりて、多くの人の愛ひややかにならん。』

（マタイ傳第24章12節）

他人を思い遣やる心など、誰も持ち合わせていない社会になります。

私たちが主のご再臨たすきで天に携たづさえ上げられた後、7年の間、大患難時代かんなんが此の地上に到来するとご経綸けいりんの中に啓示けいじされております。

そんな恐怖きょうふの到来を避ける為には、“水と霊”の御救みいに与あずかる以外に我ら異邦人が救われる道はございません。ハレルヤ！ ハレルヤ！

（2018・11・1 伊豆イエス之御霊教会 牧師 三崎 紘 文責）